福沢諭吉『文明論之概略』「第三章」に見る ギゾーの原書の「斟酌」

平　井　一　弘

序

福沢諭吉は『文明論之概略』（以下，『概略』と省略。以下，引用は全て岩波文庫版，1990）の「緒言」において，『概略』を著すに当たって「直に西洋書家の原書を訳せず，唯其大意を斟酌して之を日本の事実に参合した」（12，半角文字の数字はページ，以下同じ）と言っている。同「第三章」の記述とフランソワ・ギゾーの『ヨーロッパ文明史』（C.S. Henry 訳）の「第一講」の記述の間には，いくつかの対応が見られる。すると，福沢の「第三章」の記述の，少なくとも一部は，ギゾーの「第一講」の大意を「斟酌」した結果である，と考えてよかろう。

本論の目的は『概略』「第三章」に認められる，この大意の「斟酌」の仕方を論ずることである。本論の対象は，「メッセージ」として考えられた，福沢およびギゾーの文章である。一般的に言って，本論が対象とするような，長文の，かつ時代的に異なる，メッセージを分析することはかなり困難である。対象と議論を限定するために，本論では次の二つのことを行う。一つは，なるべく具体的に問題を提起して，それに，同じくなるべく具体的に，答えることである。もう一つの限定は，本論における議論の方法を限定することである。ここでは，ディスコース・アナリシス（談話分析）でいう，明示と暗示の対比という方法を採用する。ここで明示的メッセージとは，そのメッセージに含まれる言語や論理という，メッセージの「内的」な要素に主に頼って，そのメッセージの解釈（inference）が可能となるようなものをいう。また，暗示的メッセージとは，そのメッセージの言語的，論理的要素の「外」にあるはずのメッセージを考慮しないと，そのメッセージを解釈できないものをいう。本論において，特殊的には，暗示とは，福沢が「第三章」では「採用」しなかったが，ギゾーの「第一講」には明示されているメッセージとする。福沢がこの採用を意図的に行ったかどうか，つまり，福沢による暗示は意図的なものかどうかは，ここでは問題にしない。

本論の論述の手順は，先ず，第一節において，福沢の『概略』「第三章」冒頭の一文を問題として，暗示に関わる三つの問題を提起し，ギゾーの『ヨーロッパ文明史』「第一講」を参照しつつ，それらの問題に答える。次の第二節と第三節は，福沢がギゾーの大意をどのように「斟酌」したかの，それぞれマクロおよびマイクロ・レベルでの検討である。先ず，第二節において，「第三章」とギゾーの「第一講」の対比をマクロ・レベルで行い，第一節に見た以上の両者の対応を検討する。さらに，第三節において「第三章」と「第一講」の内容を，マイクロ・レベルで詳細に対比しつつ，そこに認められる逆対応を論ずる。

なお，本論における『概略』と『ヨーロッパ文明史』のC．S．ヘンリーによる英訳本との対応に関しては，松沢弘陽教授の校注になる『文明論之概略』の注釈に詳しいので，以下の，対応に関

わる全ての議論において，これを参考にさせていただく。

第一節　問題と解答

先ず，『概略』第三章「文明の本旨を論ず」の冒頭部を引用し，ここで問題とする一文に下線を引く。そして，この文が持つ論理的な問題点を，三つの問いの形で提出して，次に，それらを解いてみる。次がこの冒頭である（50）。

> 前章の続きに従へば，今こゝに西洋文明の由来を論ず可き場所なれども，これを論ずる前に，先ず文明の何物たるを知らざる可らず。其物を形容すること甚だ難し。<u>啻にこれを形容すること難きのみならず，甚しきに至りては世論或は文明を是とし或はこれを非として争ふものあり</u>。

1．問題とその説明

上に引用した文章は，下線部を含めて，一見どこにも難解な箇所はないように見える。しかし，実は，この下線部は，必ずしも，理解しやすい文ではない。つまり，ここに下線を施した文は明示的とは呼べない。この文を非明示的にしている具体的な要素は少なくとも三つあるように思える。これらの要素を質問の形で提出すると，第一問，「これを形容する」の意味は何か。先ず，「これ」とはいかなる意味であろうか。「これ」は前文の「其物」を受けている。すると，「其物」とはどのような意味であろうか。「其」が「文明（の）」であることは間違いなかろうが，「物」はどのような意味であろうか。さらに，「形容」とはどのような意味で使われているのであろうか。

ここで，先の「明示」と「暗示」を具体的に説明すると，上で，「これ」は「其物」を受けている，また，「其」が「文明の」であると解ることを，ここでは解釈（inference）と呼び，この解釈が最大限可能なメッセージを，明示的メッセージであるとする。それに対して，「物」や「形容」は，上記引用部より解釈することは不可能である。これを解釈しようとすれば，ここに暗示されたメッセージ（implicature）を知らなければならない。第一問は，この暗示されたメッセージをギゾーの原書にどう読み取るかという問題である。

第二問，「これを形容すること難き」（以下，「形容の困難」と略）と「世論或いは文明を是とし或はこれを非として争うものあり（以下「是非の争論」と略）は，どのような文脈で繋がるのか。これらに共通する限定的な文脈は決して明らかとは言いがたい。

ここでも「明示」と「暗示」の概念を例示する。例えば，「『文明を形容することは困難である』ばかりではなく，『文明を定義することは不可能である』」との文を作れば，これら二文に含まれている観念（「文明の形容」と「文明の定義」）は，「難易」という，程度が明示される文脈に置かれる。それに対して，上記の「形容の困難」と「是非の争論」の二観念の程度の対比を明示する文脈は自明ではない。つまり，ここには，何らかの暗示されている文脈があると仮定される。

そして，第三問，「甚しきに至て」に関して，どのような基準を想定した場合に，「是非の争論」が「甚しきに至」る場合となり，また「形容の困難」がそれほど「甚しくはない」場合となるのか。「困難」の程度が「甚しい」場合に「是非の争論」が生ずるとは考えられないので，この基準は明示されていないと考えられる。

さらに，これら三つの質問へ答える前に，辞書を参照して，福沢の文を論理的に解釈しつつ，これらの疑問を説明する。

先ず，第一問から説明する。『広辞苑』によれば，「もの［物］」とは，「形のある物体をはじめと

して，広く人間が感知し得る対象。また対象を直接指さず漠然と一般的に捉えて表現するのに用いられる」とある。福沢の言う「其物」が『広辞苑』の二番目の漠然とした意味で使われているならば，ここで問題とする必要はない。この場合は，「文明というものは（形容の難しいものだ）」と言うような，一般的な言葉遣いとなろう。

しかし，福沢の言う「其（文明の）物」が『広辞苑』の一番目の意味（本論ではこの意味に解釈する）だとすると，「其物」は，形のある物体としての文明，あるいは，広く人間が感知し得る対象としての文明，という意味になる。

おなじく『広辞苑』によれば，「形容」とは，「事物のかたち・有様を他のことばやたとえを使って言い表すこと」である。従って，「其物を形容すること」とは，「文明という事物のかたち・有様を他のことばやたとえを使って言い表すこと」となる。

この場合に重要なことは，「其物」は，「物（事物の形・有様）としての文明」を積極的に指す言葉となり，「物ではない文明」と対立する概念となり得る，ということである。すると，「形容する」も，それとの対立概念を持つ別の動詞と対立させ得るかもしれない。

第二問，すなわち，「形容の困難」と「是非の争論」はどのような文脈で繋がるのか，という疑問をさらに説明しよう。福沢の文では，「難」と「争い」の二つの語が醸し出す「否定的状況」（例えば，困難なことはまずい状態であり，争論が起こるのはもっとまずい状態である）といった，漠然としたある種の雰囲気を敢えて文脈と呼ばない限り，「形容の困難」と「是非の争論」の両者を包含する文脈はないように思える。

これらは，論理（事実の説明）と感情（価値の評価）の交錯する複雑な文脈のなかに置かれているように思われる。感情の問題はむしろ次の第三問と強い関係を持つので，その説明は第三問でおこない，ここでは論理的な解釈に関わる疑問のみを問題とする。福沢が使っている言葉に依拠して，論理的な一貫性を想定して，「形容の困難」と「是非の争論」を繋げてみる。

福沢の文では，「形容の困難」と「是非の争論」は「啻に」という接続詞で結ばれている。このことは，ある基準にしたがって，それぞれの程度を比較できることを前提にしている。『漢語林』付録の漢文についての説明によれば，「啻」は累加形といわれ，「程度の低いものを先に述べて，次に程度の高いものをつけ加える形」である。つまり，『漢語林』に従えば，福沢の文は，ある基準のもとで，「形容の困難」はその程度が低く，「是非の争論」はその程度が高い，と解釈されなければならない。

このような程度の比較を可能にするために，先ず，「形容の困難」という観念から，「文明の物を形容することは，困難である」という，主語と述語を持つ文を作る。次に，「是非の争論」という観念から，「困難である」との同じ述語を使って，「是非の争論をすることは，困難である」という文を作ってみる。こうして両者の困難さの度合いを比較する文脈を見ようとする。この比較が可能ならば，両者は難易という基準をもつ文脈で繋げられることになるが，「是非の争論をすることは困難である」という文はここでは成立しない。従って，この難易の文脈を想定することはできない。

次に，「是非の争論」を文章化して，「文明の是非を争う議論が，ある」という，主語と述語を持つ文を作ってみる。その上で，さらに「形容の困難」を「文明の物を形容する困難が，ある」と文章化しても，両者を，先に触れた，漠然とした「否定的状況」における「まずさ」を基準にして比較することは可能であっても，両者を論理的に比較することは不可能である。なぜならば，「議論」と「困難」は，それぞれの存在が示されているだけであり，両者を比較する明示的基準が示されていないからである。

論理的には「形容の困難」と「是非の争論」は，ある明確な基準を設定しその程度に関わる比較

が可能な二観念ではなく，それぞれの質が異なる観念（例えば，前者は「事実」，後者は「価値」というような）であるように思える。それにもかかわらず，言語表現（「啻に」）としては，これらの二つの観念は程度の比較が可能なものでなければならない。ここには，ある種の論理的矛盾があるように思われる。

第三問は，「是非の争論」が「甚しきに至」る場合であるとすると，恐らく「形容の困難」は，それほど「甚だしくない」場合，となろう。何を基準として，甚だしい，甚だしくない，と言えるのか，であった。第二問の説明に見たように，「是非の争論」と「形容の困難」を比較する論理的な基準がないとすれば，甚だしい，甚だしくないは，福沢の感情にしたがって，そう判断されていると考えられる。その感情は，何らかの否定的な感情であろう。つまり，「是非の争論」に福沢が込めた否定的な感情は，「形容の困難」に込めたそれよりも，否定の程度が高いことになる。ここには，具体的にどのような否定的な感情が込められているのであろうか。

2．解答とその解説

上記の第一問から第三問までに解答するためには，まず，先の福沢からの引用に直続する文章を調べて，次に，福沢の論じ方とギゾーの「第一講」の論じ方を対照しなければならない。福沢とギゾーと対照してこれら三問に答えることが，福沢の「斟酌」の性質を知るための予備的試みとなる。以下が，先の引用に続く文章である（50—51）。

> 蓋しこの争論の起る由縁を尋るに，もと文明の字義はこれを広く解す可し，またこれを狭く解す可し。其狭き字義に従へば，人力を以て徒に人間の需要を増し，衣食住の虚飾を多くするの意に解す可し。又其広き字義に従えば，衣食住の安楽のみならず，智を研き徳を脩めて人間高尚の地位に昇るの意に解す可し。学者若し此の字義の広狭に眼を着せば，又喋々たる争論を費やすに足らざる可し。

第一問，「其（文明の）物を形容する」とはどのような意味か，に解答するに当たり，ギゾーの『ヨーロッパ文明史』（ヘンリー訳）で「其物を形容すること難し」に該当するであろう文を見よう。それは次である（17）。

> Civilization is just one of these kind of facts.....The difficulty of describing it [civilization] is apparent and acknowledged...

ギゾーの原文では，上の引用部の直前には，目に見える戦争や政府の行為が歴史的「事実」であるように，目に見えない道徳や歴史哲学的な因果関係も，同様に，歴史的な事実であると強調され，そして，この引用部で，文明とは，そのような目に見えない事実（fact）の一つであるとされる。従って，上の引用には，そのような目に見えない事実としての文明を“describe”することの困難が言及されている。

福沢の言う「其（文明の）物」とは，この「事実」としての文明ではなかろうか。また，“describe”とは，ある物の外見，性質，属性等を言葉で表現することである。これは，先に見た，『広辞苑』の「形容」の意味と類似している。福沢はこの“describe”を「形容する」と「訳」したのではあるまいか。（ただし，この英語と日本語の間の大きな意味上の差異は，日本語の「形容」の意味には「たとえ」が強調されていることであろう。このことについては第三節に詳説する。）こう見る

と，福沢の言う「其物を形容することの難しさ」は，ギゾーの「事実としての文明を“describe”することの難しさ」と対応するのではなかろうか。

そうすると，「事実としての文明」に対立する概念は何であろうか。また，「形容する」に対立する動詞は何であろうか。上記の福沢の引用文には，「是非の争論」の「由縁」（本論ではこの「由縁」を「原因」と同意味とする）として，学者の「文明の広狭の両義に関する無知」が暗示されている。つまり，この争論の起こる原因は，「文明」の字義には広狭の両義があると知らないからである，あるいは，その狭義しか知らずに文明を非とする人間がいるからである，との福沢の暗示を読み取れる。

この暗示から推測すると，「事実としての文明」に対立する概念は，「文明の義」であり，また，「形容する」に対立する動詞は，「知る」であろう。すなわち，「其物を形容する」は，「文明の義を知る」に対立すると言えるであろう。

第二問，すなわち，「形容の困難」と「是非の争論」はどのような文脈で繋がるのか，への解答は複雑である。先に見たように，これら両者を包含する論理的な文脈はないように思える。この答えも，上の「蓋しこの争論の起る由縁を尋るに」以下の引用部と関係する。第一問への答えで，「是非の争論」の原因は，文明の広狭の両義に関する「無知」とされているとしたが，この「無知」に含まれている観念を，例えば，「文明の広狭の両義を知ることは，困難である」との文に直してみよう。そして，この文と，先の第二問への説明で見た，「文明の物を形容することは，困難である」とを比較すれば，両者は，それぞれの難易として比較をすることが可能になる。すなわち，それぞれ「文明の物」と「文明の広狭の両義」に関するこれらの二文は，主語は異なるが，ともに「困難である」という述語を持ち，困難さの比較という文脈において論理的一貫性を持ち得ることになる。

また，このように推測することで，第一問への答えにおいて仮定した，「其物」に対する「物ではない文明」が，「文明の義」として特定され，「文明の物」と「文明の義」が対照できることが，さらに明らかになる。さらに，「形容する」という動詞は，「知る」という別の動詞と対照できることになる。

しかし，このような推測は，「啻に」に関して矛盾を生じさせることになるが，この事は，第三問への答えで説明する。

福沢の原文が持つ論理的一貫性の欠如は，福沢が争論の「原因」を，ギゾーの同様な争論への言及（ギゾーは，そのような争論があり，自分は文明を善とする立場であることを明言しているが，争論の原因については触れていない）に付けられたヘンリーの注釈（文明の定義的説明であり，福沢がここに「原因」を読み取ったとしても不思議ではない）に求めたことと関係するかもしれない。この点については第二節で論ずる。

第三問は，「是非の争論」が，「甚しきに至」る場合であるとすると，恐らく「形容の困難」は，それほど「甚だしくない」場合，となろう。何を基準として，甚だしい，甚だしくないと言えるのか，であった。

この問題への，一応の，論理的な答えは，第二問への答えである。すなわち，「難易」という基準である。この基準に従えば，「文明の形容」には，それほど甚だしくはない程度の困難がともない，文明の是非の争論を回避すべく，「文明の広狭の両義を知ること」には，「甚しきに至」るほど多くの困難がともなうことになる。しかし，この難易の比較は，先に見た，「啻に」という累加形の論議に形式上は基づいてはいる（程度の低いものを先に述べ，次に，程度の高いものを付け加える）が，この比較には現実的な矛盾があるように思える。なぜならば，常識的にも，福沢の記述からも，文明を「形容する」ことはより難しく，文明の「両義を知ること」はより容易なことであると

判断できるからである。

「文明の物を形容すること」は常識的にも難しく，また，先の引用でも見たように，ギゾーもその困難を認めている。それに対し，「広狭両義を知ること」は常識的に見て，はるかに容易なはずである。また，福沢は，両義の解説には三分の一ページ弱しか費やしておらず，この定義の説明の後に続く，「文明の物たるや至大至重」で始まる「文明の物の形容」と思われる記述には，一ページ強を費やしている。

こうして，福沢の「啻に」の文においては，「啻にAのみならずBである」という表現が持つべき言語的な論理性（AはBよりも程度が低い）に従えば，A（形容）はB（両義を知る）よりも，困難の程度が低い，とされているとしなければならないが，この難易の程度の比較は，常識および福沢の記述より判断される難易の程度の比較とは逆になる，と言える。つまり，現実的には，A（形容）はB（両義を知る）よりも困難の程度は高いと思われる。

この論理の逆転を許しているものは，「甚しきに至ては」に含まれる感情であろう。この感情は，ある種の否定的感情であるが，この否定的感情が基準となって，上の論理的逆転が生じたように思われる。

先ず，福沢とギゾーの，叙述上の対応関係から見よう。福沢の「甚しきに至ては」に込められた感情は，福沢によるギゾーの読み方と関係しているかもしれない。福沢は「形容の困難」と「是非の争論」の二観念を「啻に・・・甚しきに至ては」で繋げているのであるが，ギゾーは同じ二観念を，福沢のように直接にではないが，

Then respecting civilization, what a number of problems remain to be solved!
（さらに，文明とはいかにも多くの厄介な問題を提起するものであります——平井訳）

という文で繋げている（17）。

この引用部は，「其物を形容すること難し」（“The difficulty of describing it”）の出所を見た先のギゾーよりの引用部と同一のパラグラフにある。ギゾーは上の引用部の後で，先に触れた文明の是非の争いに言及している。そして，このギゾーの言及に，これもまた先に触れたように，ヘンリーが「文明の義」に当たる注釈をつけている。このことから，勿論，証明することはできないが，この英文の感嘆文を，福沢が「甚しきに至りては」との否定的感情を込めて，解釈したとしても不思議ではないように思える。

もしこの考えが正しいとすると，上の引用部は，ギゾーにとっては，「多くの厄介な問題がある」と言う事実を強調するための感嘆文であったが，福沢にとっては，そこから事実とは無関係に，感情だけを「吸収」すべき感嘆文であったのかもしれない。つまり，「甚だしい」のは，事実に属する程度問題ではなく，もっぱら読み手としての福沢の側の感情の程度に関係していたのかもしれない。

以下に，これまでに見た福沢よりの，一連の引用文に暗示されていると推測される，福沢の否定的感情を読み取ってみよう。先ず，すでに見たように，福沢は，文明の是非の争論に触れた（本節冒頭の引用部）後で，「蓋しこの争論」で始まる引用部で，その争論が起こる原因を述べる。そして次に，広狭の両義を説明する。最後に，「文明」が広義に解されれば，文明の非をあげつらうことはできなくなるのは当然であるから，福沢は「学者若し此の字義の広狭に眼を着せば，又喋々たる争論を費やすに足らざる可し」と言う。この最後の文では，明らかに，学者が，「文明」という語が持つ広狭の両義を知っているかどうか，が問題とされている。しかも，ここには，特にその広義への無知より生ずる争論に対する警告，あるいは慨嘆や非難さえの感情が示されていることに注目して

おきたい。

福沢の感情的一貫性をたどろうとすると，上の文脈に暗示されている，文明の知識，理解の多寡に対する福沢の感情を推測しなければならない。先ず，福沢によれば，「是非の争論」の原因は，すでに先に述べたように，文明の広狭の両義，特にその広義に関する無知である。福沢はこの無知に対して「甚だしい」という言葉を投げ掛けているのであろう。つまり「甚だしい」ものは，何かの論理的基準に関わる，程度の最高の場合としての「是非の争論」ではなくて，それを生じさせる学者の「無知」であり，学者が「無知も甚だしい」場合には，文明の広義さえ知らずに，「是非の争論」を行うというような，「馬鹿な事態が」生ずる，のである。

そうすると，無知が甚だしくない場合，つまり，学者の文明の知識が比較的多い場合には（も），その学者にとって「形容の困難」が生ずる，と読まなければならない。こうすると，学者が持っている文明に関する知識，理解の多寡を，福沢は，それに対する自分の感情を基準として，評価し，文章化したものが，先の福沢の文であるとしなければならない。

さて，福沢は，「文明の物を形容」しようとし，これを「難しい」としている。しかし，これは，福沢の文明の知識，理解が不足しているから難しいのではあるまい。逆に，知識，理解が十分であっても，これは難しいのである。ギゾーにとっても，形容は難しいのである。その難しいことを福沢は行おうとしている。ここには，福沢自身の，文明の知識，理解の深さに対する大いなる自負を読み取ることができる。つまり，有体に言えば，福沢は「文明の形容は難しいことではあるが，俺の知識を以てすれば，形容もできる」と言っているように感じられる。福沢は自分の文明の形容に大いなる自信を持っていたのであろう。

このことからも，「其（文明の）物の形容」との観念が，「文明というものは云々」という，漠然とした表現ではなく，ある特定の意図のもとに，ある特定の「物」，すなわち文明の「形容」の意味として使われていることが解る。

こうして，「形容の困難」と「是非の争論」は，それらの属性の比較ではなく，それらに込められた福沢の否定的感情の程度の比較として，一貫した「文脈」のもとにおかれる。つまり，「啻に」は，論理ではなく，否定的感情の累加形（「形容が難しいのは，無知が甚だしいとは言えないが，両義を知らないのは，無知も甚だしい」）として成立する。

ここで，「難易」と言う論理的一貫性に戻ろう。「形容の難」はすでに明らかである。これは，最も難しいことである。すると，「是非の争論」に関して，何が「易」でなくてはならないか。次のように推測したらばどうであろうか。つまり，「是非の争論」の原因であるとされる，文明の広狭両義に関する無知は「甚だしい」無知であるとされているのであるから，実は，この「両義を知る」ことが，本来的には，「易」とされているのであろう。こうすると，「是非の争論」の「原因」を問題とすることで，「形容の困難」と，争論の原因を媒介として暗示される「両義を知ること」は，難易という論理的な一貫性のもとに置かれることになる。

繰り返せば，「形容の困難」と「是非の争論」という，一見共通の文脈を持たないかのように見える二つの観念は，前者はそのままとして，後者に関しては，「争論」ではなく，その原因とされている「無知」に注目することで，「難易」という論理的一貫性の上におかれる。また，両者に込められた否定的感情に注目することで，それらは，その「強弱」という感情的一貫性の上におかれる。こうして，本節冒頭の一文は，感情と論理が併存する文脈に置かれていると考えることができる。別言すれば，福沢の文章には，感情と論理が未分化に混在していると言える。

以上をまとめれば，「形容の難」と「是非の争論」の二観念を，漠然とした否定的感情の一貫性の上にのみ並べて解釈する時には，本節冒頭に下線を施した福沢の文の解釈上の困難は生じないであ

ろう。しかし，それらを，「難易」という論理的一貫性の上に並べて解釈しようとすると，「是非の争論」を，その原因である「両義の無知」に読み換えて，さらに「無知」を逆転させて，「知ること」にし，「知ることは容易」であるとの暗示を読み取って，「形容の困難」と対比させねばならない。この複雑な解釈のプロセスが論理的解釈を困難にしているのであろう。

また，福沢の特定な感情を問題にしようとすれば，「形容の困難」や「是非の争論」という，描写の対象に本来属する価値的評価（「困難」「争い」）ではなくて，それらの事象から独立して，それらに福沢が込めた感情的評価を読み取らなければならない。すなわち，文明の知識，理解が十分であっても困難な，文明の形容を「俺は行える」という，福沢の学者としての自負，および，容易なはずの，文明の両義の知識，理解にさえ欠けるために「是非の争論」を引き起こしている，世の学者への警告，非難や慨嘆を，福沢の文章に読み取らなければならない。

ここで付随的な問題を一つ解いておこう。問題は，「形容」と「両義を知ること」の間にはどのような「困難なこと」があるのか，である。

答えは，両義の定義の後に与えられているもう一つの定義，すなわち，「文明」とは「一国の体裁を成すという義」を知ること，であろう。後にヘンリーの注釈に触れる時に見るように，文明を指す英語の語源を知り，かつその語源から，「文明」とは「一国の体裁を成すという義」であると知ることは，単に両義を知るよりは，現実的に難しい。感情的には，この難易は，「易」であるはずの，両義の教示（福沢による）に込められた福沢の感情と，「又喋々たる争論を費やすに足らざる可し」の後で，後者の「義」の教示が行われていることからも察せられる。こうして，「第三章」始めの数ページにおいては，易から難の順で，「両義」，「一国体裁の義」そして「形容」が論じられていることが理解される。

本節で論じたことをまとめれば，『概略』の「第三章」冒頭の一文「啻にこれを形容すること難きのみならず，甚しきに至ては世論或いは文明を是とし或いはこれを非としてを争ふものあり」に関して次の三点を論じた。第一に，「其（文明の）物を形容する」とは，文明という事実（fact）を叙述（describe）する，の意味であり，「文明の義を知る」に対立して使われていること。次に，文明の「形容の困難」は，文明の「是非の争論」と対比されているのではなく，その原因である「両義の無知」に暗示されている，「両義を知ることの難しさ（易しさ）」と対比されているのであること。この暗示を読み取ることによって，始めてこれら二つの観念を論理的に一貫した文脈におくことができる。第三点は累加形と呼ばれる「啻に... 甚しきに至ては」の文において，累加されているものは論理的な難易の程度ではなくて，「甚しきに至りては」に込められた否定的感情の程度であること。

第二節　ギゾーの「第一講」と福沢の「第三章」のマクロ・レベルでの対比

前節で論じた，福沢の複雑な議論は，少なくとも部分的には，福沢によるギゾーの「斟酌」の結果であると思う。それでは，福沢はどのようにギゾーを斟酌したのであろうか。本節と次の第三節においてこの斟酌の仕方を論ずるが，本節では，「第一講」および「第三章」全体を対象として，マクロ・レベルでのディスコース分析をおこない，第三節において，パラグラフやセンテンスを対象とした，マイクロ・レベルでの分析を行う。本節では，以下に，まず，(1)ギゾーの「第一講」と福沢の「第三章」構成上の対比を行い，さらに，(2)それぞれの内容上の対比を行なうことによって，福沢によるギゾーの「大意の斟酌」の仕方を概観する。

「斟酌」とは，辞書の定義によれば，事情を考え，ほどよくとりはからう（『学研漢和大辞典』）

とされる。この定義自体が明確ではないので，ここでは「(原文の大意を）必要に応じて解釈する」の意味とする。「必要」とは，福沢が日本の文明化の方向を指し示すという必要，である。

本節における私の主張は，福沢はギゾーと同一の興味から出発しながら，その論じ方においては，ギゾーとはほぼ逆の対応をしているということである。同一の興味とは，文明とは何か，を論ずることであり，逆の対応とは，総じていえば，ギゾーが過去を論じ，福沢は未来を論じていることから生ずる，ギゾーと福沢の間の論述上の矛盾である。

1．ギゾーと福沢の構成上の対比

(1) ギゾーの「第一講」における文明の論じ方

先ず，ギゾーの「第一講」の構成を見ておこう。安土訳によるその冒頭の「この講義の趣旨」(p.2) によれば，その構成は次の通りである。ただし，後の議論のために，訳文を少し変えて，各項目を箇条書きにして，その始めに日本語訳にはない符号を付ける。各項目の後に付けた数字は，ヘンリーによる英訳書（「第一講」は，ヘンリーの注釈約2ページを含み，全体で19.5ページ）で各項目に費やされているページ数の概数（平井の判断による。また，ヘンリーによる注釈は含まない）である。

(A) ヨーロッパ文明史（1）
(B) ヨーロッパの文明史におけるフランスの役割（1）
(C) 文明というものは語りうること（1）
(D) それは歴史上の最も普遍的な事実なること（1.6）
(E) 文明なる語の日常通俗的な意味について（2.6）
(F) 二つの主要事実が文明を構成する（3.5）
　(1) 社会の発展
　(2) 個人の発達
(G) これら二つの事実は相互に必然的に結びついており，晩かれ早かれ互いに他の原因となること（3.3）
(H) 人間の運命はその現在のもしくは社会的の状態の中にことごとく包含されるか（1.3）
(I) 文明の歴史は二つの観点から観察せられ，提示せられ得る（1）
(J) 講義案について数言（0.2）
(K) 諸精神の現状と文明の将来について（2）

以下に，各項目の内容を略述する。

(A) と (B) は，第一講のイントロダクションである。その趣旨は，ヨーロッパ文明と呼ばれるあるものが，事実としてある。その文明の中心にフランスは位置している。つまり我々(ギゾーとその聴衆）は，文明そのものの中心に，我々がこれから考究しようとする事実そのものの中心に位置しているのである，というものである。

(C) と (D) は，文明とは「事実（“fact”)」であり，また，それは事実であるから，歴史的に説明可能（“may be studied, described and have its history recounted”）なものであると述べられる。(C) の冒頭は，次のように始められる (17)。

> I say fact and I say it advisedly: civilization is just as much a fact as any other ——it is a fact which like any other may be studied, described, and have its history recounted.

ギゾーの原文中の“fact”および“studied, described, and have its history recounted”は，「第一講」の前半と後半に二分された内容をそれぞれで代表する言葉である。また，これらの言葉によって，ギゾーは「第一講」の目的をも明示している。すなわち，「第一講」の目的は二つあり，初めのそれは，前半部において，文明は「事実“fact”」であることを聴衆に説得すること，第二の目的は，「第二講」から最後の「第十四講」にいたる文明の「考究（“investigate”）」に先立って，「第一講」後半部において，文明とは何であるかを確定（“to discover what it really is”(20)）しておくことである。前述の，それぞれ引用符に入れた二つの語句は，それぞれの目的と，目的に沿った論述の内容を明示しているのである。

（D）においては，文明は，歴史的にまた世界的にも，最も普遍的な事実である，とのギゾーの文明観が示される。

（E）において，ギゾーは，上の第二の目的を達するために，文明とは何か，と問う（上の，“to discover what it really is”）。ギゾーは，これに答えるに，学者の定義を敢えて避けて，日常通俗的に使われる意味に依拠しようとする。先ず，四つの社会を仮定（後述）して，常識的な文明観から，これらの社会に文明を見るか，と問う。ギゾーは，常識に従えば，これらの四社会のいずれにも「文明」を見ることはできない，とする。なぜならば，いずれにも「進歩」の観念を認めることができないからである。

そこで，（F）で，ギゾーは，（文明の）進歩とは何か，これが難しい，と言い，やはり，一般人の考えに沿って，まず，これを「社会の進歩」である，とする。だが，文明とは社会の進歩だけではなく，「個人の進歩」を含むとするが，後者は『ヨーロッパ文明史』では論じられてはいない。

（G）の相互影響とは，社会の発達と個人の発達は，文明史上密接に結び付いていること，どちらか一方の発達は，遅かれ早かれ，他方の発達を促すこと，である。

（H）から（K）は本論と直接関係がないと思われるので，内容の記述は省略する。

（2） 福沢の「第三章」における文明の論じ方

先に，『ヨーロッパ文明史』第一講の冒頭の「この講義の趣旨」によって，「第一講」の構成を示した。上述のギゾーの各項目と福沢の「第三章」の論述を関係させるために，「第三章」の内容を，ギゾーの項目に準じて項目化しておこう。項目にはカタカナの符号を付ける。各項目の後の数字は，岩波文庫版により，各項目に費やされているスペース（1ページ16行）である。

（ア） 文明の本旨（「第三章」の表題）

（イ） 文明の何物たるか（「形容の難」と「是非の争論」の観念の提示のみ）

（ウ） 文明の定義（11行）

（1） 広狭の両義（内4行）

（2） 一国の体裁を成すの義（内7行）

（エ） 文明の物の形容（17行）

（オ） 文明の在る所（28行）

（カ） 何事を指して文明というか——文明の再定義（10行）

（キ） 或る人の疑問（文明と智徳の並存は正しいか）と福沢の答えと説明（14行）

（ク） 別の或る人の疑問（文明の本旨は上下同権ではないか）と福沢の答えと説明（9.5ページ）

各項目の内容を略述すると，（ア）と（イ）は，すでに第一節で引用したものであるが，（ア）は「第三章」の表題であり，（イ）はその表題の言い換えであり，かつまた，（ウ）と（エ）を論ずる「準備」である。（ア）と（イ）は，ギゾーの（E）の一部と対応する。

（ウ）の（1）は次の定義である。狭義の文明とは，「人力を以て徒に人間の需要を増し，衣食住

の虚飾を多くする」の意。広義の文明とは，「衣食住の安楽のみならず，智を研き徳を修めて人間高尚の地位に昇る」の意。福沢はこの広狭の定義を述べた後に，（ウ）の（2）を，「文明」という語の語源である「シウキタス」は「国という義」であると言い，「故に文明とは人間交際の次第に改まりて良き方に赴く有様を形容したる語にて，野蛮無法の独立に反し一国の体裁を成すという義なり」(51) と言う。これらの定義は，ギゾーの原文［(D) の一部］に，ヘンリーによって付けられた注釈に対応している。

（エ）の，文明の物の形容とは，「文明の物たるや至大至重，人間万事皆この文明を目的とせざるものなし」で始まる，ほぼ1ページにわたる文明の記述である。この記述はギゾーの「第一講」の一部［(D) の約半分］に対応する。

（オ）においては，福沢は，ギゾーが仮定した四つの社会［(E) の一部］をほぼそのまま訳出して，ギゾーと同じように，これらに文明を見ることはできないと論ずる。つまり，（オ）と（E）は対応する。

（カ）の文明の再定義とは，福沢は四つの社会（四群の人民）の「一もこれを文明と称す可きものなし。然ば即ち何事を指して文明と名るや」(54) と問い，先の広義の文明と思えるものを再度説明した後で，次のように，「進歩」の概念を強調した文明の再定義を行う。これは，ギゾーの（F）あるいは（G）に対応するかも知れない。さらには，ギゾーに付された，ヘンリーの注釈（先に触れた注釈とは別のもの），また，トマス・バックルと関係するようである（松沢弘陽校注『文明論之概略』，319)。

（前略）文明とは人の安楽と品位との進歩を云ふなり。又この人の安楽と品位とを得せしむるものは人の智徳なるが故に，文明とは結局，人の智徳の進歩と云て可なり。(55)

以上，（ア）から（カ）までの内容を略述したが，これらの詳述は後に行う。また，（キ）と（ク）［共に「第三章」後半部に関わる］の内容の略述は，ここでは省略する。

福沢の項目とギゾーのそれとの項目上の対応関係のみを繰り返せば，次の通りである。「第三章」の表題である（ア）を除いて，（イ）と（E），（ウ）と（D）［但し，これはヘンリーの注釈との対応］，（エ）と（D），（オ）と（E），（カ）と（F）または（G)。こうして見ると，（イ）に表現されている，「第三章」前半部の骨格は主にギゾーの（E）に関係しており，福沢の論述の具体的項目は，（オ）を除いては，ギゾーのその他の項目に関係していることが解る。

上述の構成上の対比に関して，次の二つのことに注目しよう。一つは，上の項目の対応一覧から明らかなように，福沢の（イ）から（カ）の項目が，ギゾーの（A）から（G）にその順で対応していないこと，である。つまり，福沢は，「第三章」を著述するにあたり，必要と思われる事項を，必要に応じて，ギゾーより引用しており，ギゾーの論述の一貫性は無視しているようである。

二つには，各項目ごとに費やされているスペースを見ると，福沢とギゾーは必ずしも対応してはいないことである。ギゾーの（A）と（B）に見られる，ヨーロッパやフランスに関する記述に対応する記述が，福沢には無いことは当然であろう。

（C）と（D）という，「第一講」前半部（文明とは「事実」であるとの説得的記述）の中心事項（計2.6ページ）に対応する福沢の記述を調べると，次の四つのことに気が付く。第一に，（C）に関しては，対応する福沢の記述は何もないこと。第二に，（D）に関しては，文明の普遍性を一般的に説くギゾーの説明に対応する福沢の記述がないこと。第三に，（D）中の一文につけられた，ヘンリーの注釈（約1ページ）と「文明の義」(11行) との，ともにかなりのスペースを割いているとい

う対応があること。そして，第四に，（エ）の「文明の形容」と，（D）の約半分を占める，譬えをふんだんに使った，「偉大な事実」としての文明の説明が，内容的にも，分量的にも対応していること。（エ）と（D）の対応での問題点は，福沢がそこから「文明の形容」を導いたギゾーの（D）は，ギゾーの場合には，（E）においてなされる文明の「形容“description”」とは対立したものとしての，文明の「事実“fact”」の説明であること，である。

ギゾーの（E）の約半分（1.5ページ）を占める，仮定された四社会は，福沢によって（オ）の「文明の在るところ」のほとんど全部を占める「四群の人民」として，ほぼ完全に訳されている。

（F）と（G）にギゾーは多大なスペースを費やしているが，それらに対応する福沢の記述は，内容的にも分量的にも，あるかないか不明なほどである。

以上にギゾーの「第一講」と福沢の「第三章」の構成上の対応を検討し，両者の間には各トピックの記述の順序においても，また，記述に費やされたスペース（の割合）においても，大きい差異があることを見た。これらの差異は福沢によるギゾーの参照の仕方と関係しているかもしれない。富田正文は『概略』の「後記」において，福沢の島津祐太郎宛の書翰を引用して，『概略』の成立事情を説明している。この書翰によれば，福沢は『概略』を著述するにあたり「（前略）中途にて著述を廃し，暫く原書を読み，又筆を執り，又書を読み」（299）したという。上の論述上の対応の不一致は，福沢の著述の仕方の一端を示しているのかもしれない。

2．福沢とギゾーとの内容上の対比

前項末尾で福沢の「第三章」とギゾーの「第一講」の，記述上の順序および記述スペースの対応関係を論じたが，この対応関係を内容の点から見ると，この対応は，順対応と逆対応の二種に大別できる。順対応とは，福沢とギゾーが同一の内容を，同様な論述の仕方で論じている場合である。逆対応とは，順対応とは逆に，同一の内容を，ほぼ逆とも見える異なる仕方で論じている場合である。順対応と逆対応は，前節で用いた，福沢とギゾーの項目別の符号によって表現すれば，次の通りである。

（1） 順対応　　（イ）と（E）

（2） 逆対応　　（ウ）と（C），（エ）と（D），（オ）と（E），（カ）と（F）または（G）

（1） 福沢とギゾーの順対応

順対応は，（イ）「文明の何物たるか」と（E）「文明なる語の日常通俗的な意味について」の，冒頭の数行の対応のみである。先ず，ギゾーの（E）の冒頭を以下に引用する（英訳文20。日本語訳文は，安土訳，8。訳文中の［　］内は該当する英文部分）。

> Before, however, we proceed to the history of this fact, so important, so extensive, so precious, and which seems, as it were, to imbody the entire life of nations let us consider it [this fact] for a moment in itself, and endeavor to discover what it realy is.

> 諸君，かく重大な，広汎な，貴重な［so important, so extensive, so precious］，諸国民の全生活の要約［to imbody the entire life of nations］とも表現とも見えるこの事実［fact］は，しからばいったいいかなるものでありましょうか［endeavor to discover what it realy is］。わたくしはこの事実の歴史にとりかかるに先立ち，もっぱらこれをそれ自体について眺めながら，この問題を提起します［let us consider it for a moment in itself］。

上の安土による訳文中で「... 事実は，しからば一体いかなるものでありましょうか」と訳された，ギゾーの原文に対応する，福沢の（イ）「文明の何物たるか」を含む「第三章」冒頭の一文をここに再度引用すれば，「前章の続きに従へば，今こゝに西洋文明の由来を論ず可き場所なれども，これを論ずる前に先ず文明の何物たるを知らざる可らず」である。（イ）に関する論述上の特徴は，上に引用した，ギゾーの論述上の特徴にほぼ完全に対応している。先ず，ギゾーが言う「この事実の歴史」とは，ギゾーがその『ヨーロッパ文明史』の「第二講」以降において論述するヨーロッパ文明史であり，福沢の言う「西洋文明の由来」である（『概略』第八章「西洋文明の由来」は，ギゾーの『ヨーロッパ文明史』に依っている）。また，両者共に，この歴史を述べる「前（before）」に，文明とはいかなるものか，と問うている。

さらに，前節で触れた「文明の物たるや至大至重」という表現と，上記ギゾーよりの引用部のいくつかの表現が対応するように思える。先ず，「文明の物」が，第一節で論じたように「事実（fact）としての文明」とするならば（イ）「文明の何物たるか」を含む，上の福沢の一文においても「文明の何物たる」は，引用中のギゾーの「事実（this fact）」に該当するであろう。つまり，福沢はここでも「文明という事実」を意識して「何物」と言っているのではなかろうか。また，ギゾーがその「事実」を修飾している「重大，広汎，貴重」や「諸国民の全生活の要約」が，「文明の物たるや至大至重」で始まる，福沢の「文明の形容」の段落（『概略』，51—52）の，「至大至重」に，観念として対応するのではないか。

このことに関して付言すれば，後に詳しく見るように，「文明の物たるや至大至重」で始まる，福沢の「文明の形容」の段落に対応するギゾーのパラグラフは“Is it not indeed clear that civilization is the great fact in which all others merge...(19)”で始まる。ギゾーの文中の“great”だけから，福沢が「至大至重」という大きな観念を得たと考えることは，少々不自然なように思われる。恐らく，福沢はこの大きな観念を，上記引用部を含むギゾーの記述全体から受け取ったのではなかろうか。

（2） 福沢とギゾーの論述枠組上の逆対応

共に「文明とは何か」を論ずる手順を述べているギゾーの（E）の冒頭と，福沢の（イ）は上に見たように順に対応する。このように両者の冒頭の枠組みは順対応するのであるが，ギゾーと福沢は，それぞれの議論の内容上の枠組みにおいて，逆に対応する。以下に，この内容上の逆対応の枠組みを，両者の文明の論じ方の違いに見てみよう。具体的には，（i）「第三章」前半部に見られる福沢の「文明の本旨」の論じ方と，ギゾーが文明とは何かを論じた（E）の一部の内容を対比して，次に，（ii）本論第一節で取り上げた，「第三章」冒頭部にもどり，それとギゾーの（C）「文明というものは語りうること」中の文章を対比する。

（i） 第三章前半部とギゾーの（E）

ギゾーの（E）「文明なる語の日常通俗的な意味について」と，福沢の（ア）「文明の本旨を論ず」との関係とは，「第三章」全体と「第一講」後半部全体との関係である。ここではより具体的な問題として，「第三章」前半に見られる「文明の本旨を論ずる」仕方と，ギゾーの「文明をそれ自体として考察」する仕方とはどのように対応するかを見る。私は，福沢の文明の本旨の論じ方とギゾーの文明の考察の仕方は，ほとんど逆ともいえる対応関係を示していると思う。

「文明の本旨」の論は，既に見たように，（ウ）文明の定義，（エ）文明の物の形容，（オ）文明のある所，および（カ）何事を指して文明というか（文明の再定義）よりなる。

ギゾーの（E）とそれに続く（F）の文明の考察は，より細かく分析すれば，（E a）学者による文明の定義の否定，（E b）従って，常識的文明観への依拠，（E c）文明の「無い所」と仮定され

た四社会（以上（E）），（F）四社会の解釈と文明の意味，および（G）社会の発展と個人の発達の相互関係，からなる。

それぞれの項目に関して，福沢とギゾーを対比すると，（ウ）と（E a）は，文明の定義の有（福沢）無（ギゾー）に関して，また，ギゾーは（E b）「常識的文明観」に依拠しているが，福沢は文明の定義に依拠しているという意味で，それぞれ逆に対応している。

（エ）「文明の形容」は，別の意味での逆対応である。上に述べたように，ギゾーは，論述上，文明という事実があることを説得することと，それを叙述（"describe"——福沢の「形容」の概念はこの英単語と関係すると思う）することを明確に区別している。ギゾーにおいては，文明という事実が存在していることを説得をするために「第一講」前半部が使われ，文明を「それ自体」として叙述（形容）するために，（E），（F），および（G）が使われている。

しかし，福沢の「文明の形容」は，ギゾーが「形容」（叙述）のために用いた（E）（F）および（G）のいずれか，あるいは全てからではなく，ギゾーが文明という事実が存在することを説得するために述べた（D）の一部と対応している。この意味で福沢とギゾーは逆対応をしている。

さらに，（オ）と（E c）は文明の「在る所」（福沢）と「無い所」（ギゾー）に関して，逆の対応をしている。福沢の（オ）とギゾーの（E）は，ほぼ同じ四社会を論じているが，両者はほぼ逆に対応している。ギゾーが仮定した四社会を，福沢はほとんどそのままに訳出している。しかし，福沢とギゾーの四社会の論じ方は逆である。福沢は，文明の「在る所」（52）を明らかにするために，文明の認められないこれらの四社会を例示した。ギゾーは文明の認められないこれら四社会を仮定して，文明とは何か，と問うた。

最後に，福沢の（カ）とギゾーの（F）も逆に対応する。福沢もギゾーも，おなじ四社会を見て，これらのいずれも文明とは呼べない社会，すなわち，進歩の見られない社会，と解釈したのであるにもかかわらず，「進歩」の論じ方が，福沢は，文明の再定義という総合的論じ方，他方，ギゾーは，進歩を，社会と個人のそれぞれの進歩に分類して，その後に，それらの相互関係を見るという，分析的論じ方をするという，それぞれ逆な論じ方をしている。

このように同じ枠組みで，同じ問題，すなわち，文明とは何か，を論じながら，福沢とギゾーは内容的にはほぼ逆な論じ方をしている。比喩的に言えば，いわば，ギゾーが築いた土俵で，福沢とギゾーの両者が，背中合わせで相撲を取っているようである。

（ii）「第三章」冒頭部とギゾーの（C）

福沢とギゾーの逆に対応する議論の始まりとも言える，ギゾーの（C）「文明という物は語りうること」中の一文と，福沢の（ウ）「文明の何物たる」の議論の冒頭とを対比して見よう。また，この対比は，本論の第一節の議論の補助的説明でもある。以下はギゾーの文章である（17）。

> Civilization is just one of these kind of facts; it is so general in its nature that it can scarcely be seized; so complicated that it can scarcely be unravelled; so hidden as scarcely be discernible. The difficulty of describing it, of recounting its history, is apparent and acknowledged; but its existence, its worthiness to be described and to be recounted, is not less certain and manifest. Then, respecting civilization, what a number of problems remain to be solved! It may be asked, it is even now disputed, whether civilization be a good or an evil? One party decries it as teeming with mischif to man, while another lauds it as the means by which he will attain his highest dignity and excellence.[1] Again, it is asked whether this *fact* is universal—whether there is a general civilization of the whole human race—a

course for humanity to run—a destiny for it to accomplish; whether nations have not transmitted from age to age something to their successors which is never lost, but which grows and continues as a common stock, and will thus be carried on to the end of all things.

このギゾーのパラグラフの内容は（1）文明とは，非常に一般的で捕らえがたい「事実」であるということの説明（2）従って，次の二つのことが文明に関して生ずる。

（a）文明を叙述（describe）することが難しいのは自明のことと認められている。しかし，これが難しいことは自明（apparent and acknowledged）であるが，また，文明が存在し，その叙述（describe）をすることが重要であることも自明（certain and manifest）である。[叙述の困難と叙述の重要性が，「自明」という同一の観念を用いて，対照されている。]（b）文明の「価値」に関して幾つもの疑問が生ずる。その一つが，文明は善か悪かという疑問（今日でも論争の種になっている疑問）であり，他は，文明とは人類普遍の価値を持つ事実であるかどうか，という疑問である。[この疑問の説明の中に，文明の進歩という考えが明示されており，この進歩が後の考究の中心概念になる。また，文明の善悪という初めの疑問にはギゾーは直接答えずに，次の文明の普遍性への疑問に答えることによって，これに間接的に答える。] その答えは，自分は，普遍的事実であると考える。従って，普遍的文明史が書かれねばならず，そのような歴史は，全ての歴史の中でも最も高度で興味深いものであり，かつ，他の歴史を包含するものであるといって憚らない，というものである。（この最後の部分は，先の引用から削除した。）

上記のギゾーよりの引用に関係する福沢の文章は，第一節の冒頭に引用したものであるが，論述の便宜上，以下に再録する（50）。

（前略）先ず文明の何ものたるを知らざる可らず。其物を形容すること甚だ難し。啻にこれを形容すること難きのみならず，甚しきに至ては世論或は文明を是とし或いはこれを非として争ふ者あり。蓋しこの争論の起る由縁を尋るに（後略）。

ギゾーのパラグラフの中で福沢が「訳した」箇所に下線を引いてある。最初の下線部は，「其［文明の］物を形容すること甚だ難し」，つぎの下線部は，「世論或いは文明を是或は非として争ふものあり」と訳されている。そして，福沢の文章では，それらの両方が，第一節で論じたように累加形として，「啻に（形容の難）のみならず，（是非の争論）がある」とされ，文章表現上は「難」と「争論」は程度の比較が可能なものとされている。

ギゾーの原文と対比した場合，福沢の「訳」の特徴は少くとも四つある。第一に，「文明とは何か」という問いかけは，ギゾーにおいては（E）の，文明の叙述の冒頭におかれている。また，既に見たように，福沢も，ギゾーのこの部分を援用して，文明とは何かという問いかけをしたように思える。それにもかかわらず，福沢は，その答えを，ギゾーの（E）の文明の叙述にではなく，上の（C）の，文明とは事実であるという説得の部分に求めた。

第二に，ギゾーは，文明という事実の叙述の難しさと，また，それを叙述することの重要さをレトリック上明確に対照させて述べているのであるが（上の（2）の（a）参照），福沢は，その前者のみを，「形容の困難」として「訳」しているだけである。

第三に，ギゾーにおいては，文明の叙述はできるし，また，しなければならない，との主張の後に，“Then, respecting civilization, what a number of problems to be solved!” なる一文が入れら

れて，さらにその後で‘problem’の一つとして「是非の争論」は続けられるのであるが，福沢はこの主張を訳さなかったために，「形容の困難」と「是非の争論」が直結した。

最後に，第四に，「甚しきに至りては」という文句が，説明の対象（例えば，文明を形容すること）に属する，何かの程度の「難しさが」甚だしい，としてでは無く，「是非の争論（の原因）」に対する福沢の否定的感情の表出として使われた。

福沢はなぜこのような「訳」をしたのであろうか。福沢の「語り口」（後藤宏行『「語り口」の文化史』にならい，福沢の「レトリック」をこのように呼ぶ）とギゾーのレトリックを対比して，私が推測する理由は以下のようなものである。

（a）福沢は，文明とは何か，の問いに答えるに，文明の広狭の両義，一国の体裁を成すとの義（以上キゾーのCに関係する），および，文明の形容（E）の，易から難の順で答えることが妥当であると考えたのであろう。その理由は，当時の日本の学者（『概略』の読者）に見られると福沢が考えた，低度の文明の知識，理解であり，それに加うるに，「第三章」の目的が，特に，「文明の形容」という最も難しいことを行うことであった，ということではなかろうか。この易から難への順は，福沢自身の「語り口」上の要請であった，といえるであろう。

（b）福沢がギゾーのレトリックを理解しなかった。第一に，すでに述べたように，「第一講」は，文明とは事実であることの説得と，文明とは何かの叙述，に大別され，それぞれの部分が別のレトリック上の機能（説得と叙述）を持たされていることを福沢は理解しなかった。第二に，上のギゾーよりの引用部は，“Then, repecting civilization”を境目として，その上は，文明に関する「事実」の説明（「形容が難しいことは自明である」および，「形容が重要であることは自明である」），その下は，文明に関する「価値」の説明（「文明の善悪」および，「文明の普遍性」）として，別個のレトリック機能を持たされているが，福沢は，この機能上の差異を無視して，上から一つの観念（「形容の困難」），下から別の一つの観念（「是非の争論」）を選び，一文に繋げた。古来より，西欧のレトリックでは「事実」と「価値」は別個のものとして峻別される。

（c）ギゾーの「事実」の説明中の観念である「形容の困難」に，「価値」の説明中の観念である「文明の善悪」を結び付けようとして，福沢は，「文明の善悪を争う論争がある」という，ギゾーの文明の価値観の説明を，「争論」に対する自分の価値判断として表現した。この福沢自身の価値判断に伴う感情が，「甚しきに至りては」（先に触れたように，“problems”を含む文の解釈かもしれない。この英文を私が訳すと「さらに，文明とはいかにも多くの厄介な問題を抱えているものであります」となる。）として，感情が強く込められたのではなかろうか。これも，福沢自身の「語り口」であると考えられる。

上の三つの理由を，特に（b）を中心として，もう少々説明する。ギゾーは，上に引用したパラグラフで，文明という事実は記述する価値のあるものであり，かつその記述は最高度な歴史となるということを，巧妙なレトリックで聴衆に説得しようとしている。第一に，文明の記述の重要さを強調するために，その難しさを引き合いに出すというレトリックが用いられた。つまり，文明の記述が困難なことは，自明（apparent and ackowledged）であるが，また，記述が重要であることも，同様に自明（not less certain and manifest）である，とする。「記述の困難」と「記述の重要さ」が，「自明」という同一の観念を軸にして対照されるために，前者が困難であればあるほど，後者の重要さは強調される。また，文明の是非の問題には，直接的には，引用中の「是」の主張にあらわれる“his highest dignity and excellence”によって，間接的には，削除部分の，普遍文明の支持によって，ギゾーは文明を非とする論を効果的に論駁する，というレトリックを使っている。

見事なレトリックである。ギゾーは，歴史家であるとともに，『共産党宣言』の冒頭に，メッテル

ニッヒと共に名指された保守政治家であったが，また，当時の雄弁家としても有名であった（サンジェ，84)。『ヨーロッパ文明史』はその雄弁を彷彿させる。

福沢の「訳」は，このパラグラフフのほんの一部にすぎないばかりでなく，パラグラフの主要な内容とも関係はない。主要な内容と比較すれば，「文明の形容が難しい」といっても「文明の是非を争う世論がある」といっても，それらの「訳」は，文字通り断片的な「訳」にすぎない。福沢の「訳」が断片的と言うのは，ギゾーのこのレトリックを完全に無視しているということである。福沢は何故このような「訳」をしたのであろうか。勿論，福沢はギゾーのレトリックを理解できなかった。しかし，それ以上に，それを理解できなかったから，逆に，ギゾーを比較的自由に解釈して，その解釈を福沢自身の「語り口」で表現した。

福沢のギゾー解釈の視点は，大略次のようなものであったとしてみよう。つまり，福沢はギゾーが報告する，西洋における，文明の是非を巡る争いと，その原因に興味を持った。福沢は，ヘンリーの注釈より，その原因は，文明の広義さえも知らぬほどの，無知であると知った。その無知に対して，感情的には，無知も甚だしい，と感じた。さらに，論理的には，文明の進んだ西洋でもそれほどの無知が世論の一部にあるならば，半開の日本では，この種の無知は一般的であるから，先ず，文明の定義を，ここで優先させなければならないと思ったのであろう。こうして，困難の程度の高い「文明の形容」に，難度の低い「文明の定義」を優先させて論述した。これが，福沢自身の語り口である。

こうして，福沢は，この争論の説明，つまり，“One party decries it...his highest dignity and excellence.”に付けられたヘンリーの注釈に議論を移し，ヘンリーの注釈中に，「文明の義」を読み取った。その結果が，次の，（ウ）と（C）の中心部分との逆の対応となったのではなかろうか。

第三節　ギゾーの「第一講」と福沢の「第三章」のマイクロ・レベルでの対比

前節では，第一講と第三章を対比して，チャプターや数パラグラフのマクロなレベルでの分析を行ったが，本節では，この対比を，パラグラフやセンテンスのマイクロなレベルで行う。具体的には，前節で触れた個別的な逆対応を，次のように特定化して論ずる。

（1）福沢による（ウ）「文明の定義」とギゾーの（C）「文明というものは語りうること」における一文に付せられたヘンリーの注釈，（2）福沢による（エ）「文明の物の形容」とギゾーの（D）「普遍的な事実としての文明」の一部としての文明の譬え，（3）福沢によって（オ）「文明の在る所」とされた四群の人民と，ギゾーの（E）「文明の日常通俗的な意味」における仮定された四社会，および（4）福沢による（カ）「文明の再定義」とギゾーの（F）および（G）における文明の叙述。

1．（ウ）と（C）の逆対応――文明の定義の否定と肯定

ギゾーは，文明の叙述のために学者の文明の定義を採用することを拒否した。しかし，福沢は文明の定義を以て，文明の本旨の議論を始めた。ギゾーは「第一講」で，文明とは何か，を論ずるにあたり，学者による文明の定義を敢えて避け，一般人の常識的文明観に立脚して，文明を叙述（“describe”）しようとした。その理由は，ギゾーによれば，「もっともいっぱんてきな用語の通常の意義の中には，まずたいていの場合，見かけはずっと精確で厳密な科学的定義の中よりいっそう多くの真理がある」（安土訳，8）からである。

福沢は，逆に，文明の定義に固執した。福沢は，既に第一節および第二節に見た，「第三章」の冒

頭部分の「(文明の是非を) 争ふものあり」の後で，文明の善悪の論争があることを指摘したギゾーの文に付けられた（前節における "Civilization is just one of these facts" で始まる引用中の上付1）ヘンリーの注釈に議論を移し，この注釈に文明の「義」を二つ読み取った。文明の「広狭の両義」と，文明とは「一国の体裁を成すの義」である。ヘンリーの注釈は以下のように始まる。

This dispute turns upon the greater or less extension given to the term.

Civilization may be taken to signify merely the multiplication of artificial wants, and of the means and refinements of physical enjoyment.

It may also be taken to imply both a state of physical well being and a state of superior intellectual and moral culture.

It is only in the former sense that it can be alleged that civilization is an evil.

福沢は，上の引用中の最初のセンテンスから，「蓋しこの争論の起る由縁を尋ねるに」とされた「由縁」，すなわち，争論の原因を読み取り，その原因は，人々が，文明の広狭の両義の区別をしないからである，とする。さらに次の二つのセンテンスから，狭義の文明は，「人力を以て徒に人間の需要を増し，衣食住の虚飾を多くする」であるのに対して，広義の文明は，「衣食住の安楽のみならず，智を研き徳を修めて人間高尚の地位に昇る」の意である，と「訳」をする。最後の文を「学者若しこの字義の広狭に目を着せば，又喋々たる争論を費すに足らざる可し」と，福沢は「訳」し，両義の無知より生ずる，学者の論争を，苦々しげに，切り捨てている（51)。

次に，福沢は，「一国の体裁をなすと云ふ義」としての文明を，やはり，ヘンリーの注釈より引き出す。ヘンリーの注釈全体は，福沢によって見事に要約されている（『概略』51）ので，ここでは省略して，福沢のこの定義に関わる部分のみを以下に引用する。

Hence it is from the political organization of society, from the establishment of the STATE, (in Latin *civitas)* that the word civilization is taken.

Civilization, therefore, in its most general idea, is an improved condition of man resulting from the establishment of Social order in place of the individual independence and lawlessness of the savage or barbarious life.

この部分の福沢「訳」は，前段が語源から「文明とは（中略）国と云ふ義なり」であり，後段は「故に文明とは人間交際の次第に改まりて良き方に赴く有様を形容したる語にて，野蛮無法の独立に反し一国の体裁を為すと云ふ義なり」である。

ヘンリーの注釈は三分の二ページにわたり，その内容は文明に関する基本的知識であり，厳密な定義とはいえないであろう。福沢が，そこから文明の広狭の両義を引き出したギゾーの注釈は，文明の是非の争いは「文明」という語の，広狭の解釈をめぐるものであるという説明である。また，福沢が「一国の体裁を為すと云ふ義」をそこから引き出した英文は，ヘンリーによる，野蛮から文明に至る社会発展のプロセスの説明（上記引用英文の前段で終わる）のパラグラフの最後の数行（すなわち，引用の前段）と，そのまとめとして付け加えられた次のパラグラフ（上記引用英文後段から始まる）の最初の数行（後段）から成る。この前段は，「文明」の語源の説明である。その後段は，これを定義と呼んでも良かろうが，正確には，文明の定義であるよりは，その一般的概念（"most general idea"）の説明と見るべきであろう。福沢は，ギゾーが敢えて避けた文明の定義

に，ヘンリーの注釈さえかなり強引に利用して，強く執着した。このように，福沢とギゾーは，共に文明とは何かを論じながら，文明の定義への依存に関して，逆の対応をしている。

2．（エ）「文明の物の形容」と（D）「文明という事実の説得」の逆対応

福沢は，文明の定義の後でようやく（エ）「文明の物の形容」を行うのであるが，この形容のために福沢が用いたギゾーの記述は，ギゾーが文明を「形容（describe)」した「第一講」後半部にある（E）に見出されるものではなく，ギゾーがこの形容を行う前に，文明というものは事実であると説得するための記述である前半部中の（D）に見出されるものである。

以下に，福沢の文明の形容と，ギゾーの，文明という事実の説得の文章を対照させる。ともに，後の説明のために符号を付ける。

（1）文明の物たるや至大至重，人間万事皆この文明を目的とせざるものなし。（2）制度と云ひ文学と云ひ，商賣と云ひ工業と云ひ，戦争と云ひ政法と云ふも，（3）これを慨して互いに相比較するには（4）何を目的としてその利害得失を論ずるや。（5）唯其良く文明を進めるものを以て利と為し得となし，（6）其これを却歩せしむるものを以て害と為し失と為すのみ。

(A)Is it not indeed clear that civilization is the great fact (a) in which all others merge; (b) in which they all end,(c) in which they are all condensed, (d) in which all others find thier importance? (B)Take all the facts (a) of which the history of a nation is composed, (b) all the facts which we are accustmed to consider as the elements of its existence—(c)take its institutions, its commerce, its industry, its wars, the various details of its government; (d) and if you would see their various bearings on each other,(e) if you would appreciate their value, (f) if you would pass a judgment upon them, (g) what is it you desire to know? (C) Why, what they have done to forward the progress of civilization—(a) what part they have acted in this great drama,—(b) what influence they have exercised in aiding its advance. (D)It is not only by this that we form a general opinion of these facts, (a) but it is by this standard that we try them, (b)that we estimate their true value.

日本文（1）は英文（A）に対応する。この対応で，“fact”が「文明の物」と「訳」されたと推測される。（Aa）は福沢によって訳されていない。但し，「第三章」後半部の初めに，文明は「人間万事を包羅し（55)」と，“all others merge”に類似した表現がなされている。（Ab）の主語“they”は（Aa）“all others=other facts”であり，福沢はこれを「人間万事」と「訳」している。さらに，（Ab）の“end”のみが「訳」され，しかもそれが，「目的」とされたことには注意を払うべきであろう。ギゾーの英文の“end”は「おわり」，すなわち，ここでは「結果」を意味している。

日本文（2）は英文（Ba，b，c）に対応する。ただし，（Bc）のみが「訳」されているが，福沢の「文学」に該当する語は，ギゾーにはない。

日本文（3）は（Bd)，同（4）は（Be，f，g）に対応する。

日本文（5）と（6）は英文（C）と（D）に，内容上，対応する。

英文（D）にそのまま対応する日本文はないが，（D）に示されたギゾーの文明の観念は，福沢によって変形されて用いられている。ギゾーにとって，文明は個々の歴史的事実の，一般的（“general”，あるいは，真実の価値（“true value）の価値基準（standard）であるが，福沢にとって

は，文明は，日本文（4）に見るように，それを目的として，諸事実の利害得失を判断するものである（福沢の「目的」と「利害得失」の関係については，平井1993ａ，1993ｂで詳説した）

さらに福沢とギゾーの対比を続ける。以下の引用は，両者ともそれぞれ上の引用に直続する部分である。

文明は恰も一大劇場の如く，制度文学商売以下のものは役者の如し。此役者なるもの各得意の芸を奏して一段の所作を勤め，よく劇の趣意に叶ふて真情を写出し，見物の客をして悦ばしむる者を名けて役者の功なる者とす。（中略）文明は恰も海の如く，制度文学以下の者は河の如し。河の海に水を潅ぐこと多きものを大河と名け，其これを潅ぐこと少きものを名けて小河と云ふ。文明は恰も倉庫の如し。人間の衣食，渡世の資本，生々の気力，皆この庫中にあらざるはなし。

These are, as it were, the rivers of whom we ask how much water they have carried to the ocean. Civilization is, as it were, the grand emporium of a people, in which all its wealth—all the elements of its life—all the powers of its existence are stored up.

本論第一節において，私は，ギゾーによる文明の「叙述（description)」を，福沢は文明の「形容」としたのであろうと言い“description”と「形容」の辞書的意味の異同を示した。その大きな差異は「形容」という日本語には，「譬え」を用いての記述が特記されていることであった。上記引用中の，福沢とギゾーの文明の譬えを比べると，文明を「海」に，また，「倉庫（“emporium”は，「市場」あるいは「商業の中心地」の意)」譬えていることは，両者に共通である。差異は，ギゾーが譬えとして用いていない「劇場」を，福沢は，極めて熱心に，文明の譬えとして詳説していることである。上に省略したところには，実は，役者に関する四行の文章が入っている。私は，この劇場の譬えは，先に，センテンスごとの対応関係を示した時に引用したギゾーの文章中の，（Ｃａ）“what part they have acted in this great drama”の，福沢の解釈なのではなかろうかと思う。

上の二対の引用に見られる福沢とギゾーの逆対応は，第一に，文明を人間万事の「目的」としているのに対し，ギゾーは文明は諸事実の「結果」であるとしていることである。第二に，福沢は文明という目的から人間万事の「利害得失」を判断するとしているが，ギゾーは過去の諸事実の「価値」を判断する基準として文明があると言う。第三の相違は，福沢による文明を劇場とする，大々的な譬えは，ギゾーでは諸事実が文明への貢献に「いかなる役割を演じたか（“what part they have acted in this great drama”)」という，慣用的な表現にすぎないこと，である。

これらの逆対応はすべて，福沢が日本を文明化するという未来志向から，ギゾーが歴史家として論じた過去を，「斟酌」したことによって生じたのであろう。

一般的には，福沢による「目的」や「利害得失」の語の使い方は，かなり曖昧であり，文字通りの意味のほかに，「目的」は，判断基準，評価基準を，「利害得失」は，真偽，善悪も表すことがある（平井，1992)。しかし，この「第三章」を含む『概略』においては，福沢は，文明を目的として，「人間万事」を文明という目的に達する手段と見なした，といって正しいであろう。

さらに，ギゾーの文と福沢の文は，劇場の譬えを除けば，福沢によるギゾーの「訳」として，それぞれの内容はほぼ同一なのであるが，ギゾーのレトリックと福沢の「語り口」に見られる両者の論述の仕方は微妙に違っている。その理由は，ギゾーと福沢が，それぞれ過去と未来に関わる，逆対比される意図のもとに，それぞれの文を書いているからであろう。

ギゾーの意図は，「文明」が“fact”であること，しかも，個々の“fact”を包含する“great fact”であることを，過去を語ることによって，聴衆に説得することである。上の引用では，個々の事実が，文明という，より大きな事実に“marge”（「包含」）されている状態を，（A）で示す。次に，（B）で，歴史上事実として皆が認めている個々の事実をあげて，それに人が判断を加える場合には，文明の進歩への寄与を基準とする，ことが述べられる。つまり，個々の事実を評価する基準は，やはり，文明という，事実であり，しかも個々の事実を超える「偉大な事実」であると言う。これがギゾーの説得方法である。そして，さらに，この偉大さが，“ocean”や“emporium”で譬えられ，評価基準としての文明に従えば，上の引用には省略したが，「独裁」や「無政府」も，それが文明を進めた限りでは評価される，と説く。

しかし，福沢の文は，別に意図を持つように思われる。その意図とは，「第三章」の冒頭に示されている，「文明の何物たる」かを教示し，読者を正しい文明化論に導き，ひいては，日本を文明化することである。つまり，「文明の物たるや至大至重，人間万事この文明を目的とせざるものなし」とは，文明の形容であるよりは，日本の文明化という未来に向けて，その方向を教示するものであるように響く。これが教示に響く理由の第一は，利害得失の強調である。「人間万事文明を目的とする」として，万事において，それが文明を進めるものであれば，それは利であり，そうでないならば，それは害であるという，利害得失の判断の根拠として文明が使われている。この「文明を目的として利害を判断する」と，ギゾーの「文明を基準にして他の事実を評価する」は異なる。前者は未来志向，あるいは未来から見た現在の評価であり，後者は過去志向，あるいは，現在からみた過去の価値判断である。

福沢の文章が教示に響く第二の理由は，上記引用には省略したが，福沢がギゾーの言っていることを「訳」して，内乱戦争，独裁暴政等の「人間の事物或は嫌う可きものと雖も」文明の進歩への貢献著しい時には，「これを捨てゝ問はず」（52）として，説明抜きの断言を行っていること。さらに，この考えは「第三章」の後半で，文明化するためには君主制であってはならぬとする議論に，「是所謂片眼を以て天下の事を窺ふの論なり」（56）との批判を加えて「文明を進歩させるためのものであるならば，政治制度は何であっても構わない」との趣旨の反論を，膨大なスペースを割いて，行っていることである。

最後の逆対応は，譬えとしての文明の「形容」と関係している。つまり，ギゾーによる日常的な言い回し（“what part they have acted”）にすぎないものが，福沢によって「偉大なるドラマ」というような，文字通りの解釈をされて，さらに，その解釈が，「海」や「倉庫」と同一レベルの比喩として，「劇場」の譬えに拡大されていることである。福沢はなぜギゾーの日常表現に，非日常的な劇場の譬えを対応させたのであろうか。

まず，福沢によるギゾーの読み方を考えると，福沢は，ギゾーの“drama,”“ocean,”“emporium”を，三つの並列された「譬え」として読んだように思える。その証拠は，後者二つに付けられている“as it were”（「如く」）を，“drama”にも，「一大劇場の如く」として，表現上，付けていることである。さらに，この「一大劇場」を福沢の誤訳であるとするのは正しくはなかろう。誤訳にしては，都合六行にもわたる念入り過ぎるほどの説明が与えられている。勿論，福沢が“what part they have acted”を解釈できなかった可能性はあるかもしれない。

しかし，福沢の英語力の多寡以上に興味深いことは，「一大劇場」の比喩が，福沢のみにあって，ギゾーには見られないことであり，また，それにもかかわらず，これが，ギゾーに見られる「海」や「倉庫」と同様に，「如し」という語を使って表現されていることである。すなわち，「文明は恰も一大劇場の如く」であり，「文明は恰も海の如く」であり，また，「文明は恰も倉庫の如し」であ

る（福沢の「譬え」に関しては，平井，1994）。

以下は，既に論じた，「文明の物の形容」に感じられる福沢の自負からの私の推測にすぎないが，恐らく，福沢は，この“great drama”を「一大劇場」と解釈して，それを文明の譬えとして使ったことに，ギゾーには見られない福沢自身の文明解釈とその表現の独創性を自認していたのではなかろうか。この独創性は，やはり福沢の未来志向を暗示している。海や倉庫は，過去から現在に至る，人間の意思の及ばない結果であるのに対して，劇場の役者は，意思と努力によって，「巧なる者」となり得る。ちょうど，当時の日本がその意思と努力によって文明化を成し得たように。

3．（エ）文明の「在る所」と（E）文明の「無い所」の逆対応

文明とは何かを論ずるに当たり，ギゾーが仮定した四社会とは，それぞれ次のような社会である。

（1） 物的には満足できるが，知的，道徳的には無気力

（2） 物的には我慢できる状態にあり，知的，道徳的にもある程度発達しているが，沈滞した精神生活。

（3） 若干の個人は暴力的に自由に振る舞えるが，社会的には混乱と不平等。

（4） 各個人の自由は大きいが，公共的観念が稀薄。

福沢は，ギゾーが仮定した，文明の認められない四社会をほぼ忠実に「訳出」して，「四群の人民」としている。しかし，ギゾーの原文と福沢の訳文との間には，微妙な差異がある。この差異は，（1）福沢が，文明の「在る所」を論ずるために，ギゾーが文明が「認められない（無い所）」とした四社会を用いたこと，（2）ギゾーがこれら四社会を論ずるにあたって用いた巧妙なレトリックを，福沢が見逃していること，に起因する。

先ず，福沢の論じ方から検討しよう。福沢は，「今仮に数段の問題を設けて文明の在る所を詳にせん」として，四群のそれぞれを叙述する。以下の下線部と波線部は各群毎でそれぞれ対立する観念を示す。

第一群「衣食住の安楽あるのみにて，その智徳発生の力をば故さらに閉塞して自由ならしめず，民を視ること牛羊の如くして，これを牧しこれを養ひ，唯其飢餓に注意するのみ」

第二群「其外形の安楽は... 亦堪ゆ可らざるに非ず... 智徳の路は全く塞がるに非ず... 然りと雖ども，自由の大義は毫も行はるゝことなく，時々物々皆自由を妨げんと注意するのみ」

第三群「其有様自由自在なれども，毫も事物の順序なく，毫も同権の趣意を見ず。大は小を制し，強は弱を圧し，一世を支配するものは唯暴力のみ」

第四群「人々其身を自由にして之を妨るものなく，人々其力を逞ふして大小強弱の差別あらず... 各人其権義を異にすることなし。然りと雖も，此人民は未だ人間交際の味を知らず... 人々その力を一人のために費して全体の公利に眼を着けず，一国の何者たるを知らず交際の何事たるを弁ぜず」

第一から第四群のそれぞれは，互いにどのように異なるのであろうか。第一群と第二群は，衣食住の安楽が保障されていることについては同一であるが，相違は，第一群の人民は，智徳の発生が閉塞されているのに対して，第二群では，智徳の発生は完全に閉塞されているのではないが「自由の大義」が全く行われていないことである。福沢は，第二群には「自由の大義」がないから，智徳は，人民が「自らこれを得るに非ず，他に依頼してこれを得るのみ」とし，また，道を求める者がいても，「自ら［の］ために求めること能はずして人のためにこれを求めるなり」とする。ここでは，「自由の大義」とは，智徳を自らの力で，自らのために求める自由とされている。

第二群と第三群は，社会の在り方としては全く異なるものでありながら，福沢の表現上は，「自由」という言葉を巡って，相互に関係している。すなわち，第二群には「自由の大義」は認められないが，第三群の人民の「有様は自由自在」であるとされ，自由の有無という対立関係をつけられている。

第三群と第四群の共通点は，どちらにも自由が認められることである。相違点は，「同権」の有無である。第三群は，少数の強者に自由は認められるが，弱肉強食の社会であって，人民の同権は認められないのに対して，第四群では，大小強弱の差別がなく同権が認められる。

第四群には，第一，第二群では言及されず，第三群では「事物の順序」として，暗示されているような，また，そうではないような観念が付け加えられている。それは，「人間交際」，すなわち，社会の公共性という観念である。そして，福沢は，第四群にはこの観念が認められない，とする。

福沢の四群の，前の二群と後の二群は，「自由」の観念を巡って相互に関係する。すなわち，前者には自由がなく，後者には自由がある。しかし，前者と後者の自由の意味は異なる。前者の自由は，智徳の自由がない，ということであり，後者の自由は，自由同権に関係する。後者の第三群には，自由はあるが同権はなく，第四群には，自由も同権もある。しかし，ここにも未だ公共性はないから，これを文明とは呼べない，と福沢は論ずる。

福沢のこの「何々はあるが，何々がないから，文明とは呼べない」とする論じ方は，福沢の意図する結論（文明とは，智徳の進歩である）を引き出せない論じ方である。仮に，公共性の認められる第五群を設定しても，「公共性」は福沢の結論とは無関係である。この論じ方がなされた原因は，先に見たように，福沢が「文明の在る所を詳」らかにするために，文明の「認められない」四群を，ギゾーに習いながらも，ギゾーの巧妙なレトリックに注意を払わずに論じたからであろう。

ギゾーの仮定した四社会の有様自体はほぼ福沢が「訳」した通りである。従って，以下にはギゾーのレトリックのみを問題とする。ギゾーは，各社会ごとに，また，第一，第二の仮定と，第三，第四の仮定との間に，「進歩」に関する巧妙なレトリックを用いている。

まず，仮定された各社会ごとに「進歩」のないことがレトリックとして暗示される。ギゾーの仮定した各社会の説明の内部に見られる，結論へ向けてのレトリックを検討する。この結論自体は，福沢と同様，いずれの社会にも文明は認められないとするものであるが，論じ方は，福沢と違い，各社会毎に「進歩」の観念が認められないことが確認される。仮定した社会の第一では，その説明の最後に，“Do we recognise here a people in a state of moral and social advancement?（下線は平井。以下同じ）”として，「進歩」の観念のないことが暗示されている。

この種の暗示は，第二から第四の社会に共通している。第二では，“Immobility is the character of its moral life...in which theocratic government restrains the advance of man(22)”とされ，第三では，“It may without doubt contain germs of civilization which may progressively shoot up(22)”とされ，最後の第四では，“Generation after generation pass away, leaving society just as they found it(22)”と，「進歩」を示す言葉は使われてはいないが，進歩のないことは暗示されている。

ギゾーが仮定した四社会では，第一と第二の仮定と，第三と第四の仮定では，仮定的に問題とされているものが異なる。第一と第二の仮定では，智徳（“moral and intellectual activity” 21）と社会の関係が問題とされ，次に，仮定の性質の変更が明示されて（“I will change entirely the nature of the hypothesis” 22），第三と第四の仮定では，個人の自由と社会の関係が問題とされる。

第一と第二の仮定された社会が，智徳を問題として，第三と第四の社会が自由を問題としていること自体は，ギゾーも福沢も変わらない。両者の相違は，ギゾーが，第一および第二の社会と，第

三および第四の社会を，上に見た明示的な言葉で区別したのに対して，福沢は，第二群と第四群の間に，「自由の大義」を置いて結び付けたことである。その結果，福沢の第一群から第四群は，すべて「自由」という語によって，何らかの関係をつけられた。

このようにして，ギゾーは，文明の認められない四社会を説明しながら，認められない理由は，それぞれに進歩の徴候が認められないからであるという，言葉による暗示をする。さらに，第四の仮定の最後に，社会の成熟（人間交際）の欠落を見ることによって，その結論，文明とは，第一に，「社会の進歩」を意味する，を導いて行く。

ここに見られる，福沢とギゾーの逆対応は，福沢が文明の認められないはずの四群を文明の「在る所」の説明に用いたのに対して，ギゾーは，同じ四社会を文明の「無い所」として用い，その文明のない理由を一々暗示したことにある。また，福沢の公共性の観念が結論に結び付かないのに対して，ギゾーはまさに文明とは社会の進歩であるとの結論を引き出すために，「社会」の観念を用いていることにある。

4．（カ）と（F）および（G）の逆対応——福沢の文明の再定義とギゾーの「進歩」

最後の逆対応の例は，福沢の（カ）「何ごとを指して文明というか」と，ギゾーの（F）「文明発達の二つの主要な事実，社会の発達と個人の発達」，および（G）「社会と個人の相互関係」との対応である。

先に，ギゾーも福沢も，四社会を仮定して，共にその後で，文明とは何かと問うたことを見た。しかし，両者の問いかけ方は異なり，従って，両者の答えも異なる。先ず，ギゾーはこれら社会に文明が認められないことを確認して，その理由はこれらのいずれにも「進歩」が見られないことであるとする。そして文明の「進歩」とは何の進歩をいうのか，とさらに問い，その答えは大変難しいが，第一に「いわゆる社会の，人間相互の関係の発達を」，そして次に，「個人生活，内面生活の発達」をいうとする（安土訳，11－12）。

先ず，ギゾーの問いかけを見よう。

> It is evident that none of the satates which I have just described will corresponed with the common notion of mankind respecting this term. It seems to me that the first idea comprised in the word civilization (and this may be gathered from the various examples which I have placed before you) is the notion of progress, of development. It calls up within us the notion of a people advancing, of a people in a course of improvement and melioration.

この引用部には，“progress” “development” “advancing” “improvement” の「進歩」を明示する言葉が多用されている。そして，これらの言葉は全て，ギゾーが仮定した四社会から帰納的に導かれた結論を表す言葉である。

福沢は，ギゾーと同じプロセスで，同じ理由を問う。福沢は，「右四段に挙る所の例を見るに，一もこれを文明と称す可きものなし。然ば即ち何事を指して文明と名るや」と問い掛ける。それに答えるに，まず，先に見た文明の定義の一つである文明の「広義」にもどり，安楽だけでも高尚だけでも文明とはいえず，両方が備わって文明となる。安楽にも高尚にも限りはなく，「其安楽と云ひ高尚と云ふ物は，正に其進歩する時の有様を指して名けたるものなれば，文明とは人の安楽と品位との進歩を云ふなり」として，文明の定義と進歩という概念とを結ぶ。そして最後に，人に安楽と品

位を得させるものは，人の智徳であるから，「文明とは結局，人の智徳の進歩と云ひて可なり」として，文明の再定義を行う。福沢はこの定義から再定義へのプロセスで，初めて「進歩」の観念を持ち出す。これは大変迂遠な論じ方である。

ギゾーと福沢の逆対応は両者の目的と手段に関係している。第一に，ギゾーが，個人の発達は目的であり，社会の発達は手段であるとするのに対して，福沢は，安楽と品位を得せしめるものは智徳であるとして，安楽と品位が目的であり，智徳は手段であるかのごとく言う。もし，個人の発達と智徳の発達を同じ観念だとすれば，ギゾーにおいては個人の発達が目的，福沢においては同じ観念の智徳の発達が手段とされ，逆に対応する。第二には，福沢の言う安楽と高尚を，ギゾーの言う社会と個人とすれば，ギゾーが文明に両者の発達を見たのに対して，福沢は文明の再定義で，智徳の発達を，安楽と高尚，すなわち，社会と個人の発達の，上位概念とした。このように，ギゾーと福沢は上位概念のあるなしに関して逆の対応をしている。

福沢の文明の再定義は，必ずしもバックルの援用（丸山，上，229）ではなく，福沢がギゾーの（F）と（G）を熟慮した結果であるとも考えられる。そう考えられる理由は，第一に，福沢は四群の人民（ギゾーが仮定した四社会）にすでに「進歩」を見ているとも言えるからである。この進歩とは，「自由」の進歩である。第一群には，智徳発生の自由がない。第二群には，智徳を自分で求める自由がない。第三群には，智徳の自由はあるが，同権はない。第四群には，自由と同権がある，とされている。第二の理由は，ギゾーが（G）で行っている，社会の進歩と個人の進歩の議論に関係する。ギゾーは，文明において，社会の発達と個人の発達のいずれが目的で，いずれが手段かと問い，前者は手段，後者は目的である，と暗示した（30）。ギゾーの個人の発達とは，福沢の「智徳の進歩」である。福沢は，ギゾーの（F）と（G）から，「文明とは智徳の進歩」である，を引き出したのかもしれない。

福沢のこの再定義の特徴は二種類に大別される。両者とも福沢の「語り口」に関係するが，その一つは，定義から再定義に至るプロセスでの「言葉遣い」の問題であり，その二つは，『概略』全体における議論の「伏線」の問題である。これらの二種類の特徴は互いに関係するのであろうが，ここでは便宜上別個の特徴とする。

第一の特徴である，定義から再定義にいたるプロセスを見る。まず，「第三章」の始めの文明の広義では，文明とは「衣食住の安楽のみならず，智を研き徳を脩めて人間高尚の地位に昇る」とされている。つまり，ここでは「高尚」は「智徳」より成ることは明らかであるから，広義では文明は安楽と高尚＝智徳より成る。だが，ここでの，広義から再定義に至るプロセスでは，まず「文明とは人の身を安楽にして心を高尚にする」とされる。つまり，先には，安楽と高尚＝智徳の並存が問題とされていたのに，ここでは，「人」の「身の安楽」と「心の高尚（品位）」（智徳との関係が不明確化）の並存が問題となる。そして，さらに，「安楽」や「品位の高尚」とは，「進歩」の有様を指すとされる。つまり，安楽と品位（心の高尚）の並存ではなく，それらの停滞か進歩かが問題とされる。最後に，再定義では，安楽と品位は智徳によりもたら（進歩）されるから，文明とは，結局，智徳の進歩のことだとされる。福沢は，定義から再定義へのプロセスで，広義にあった「高尚＝智徳」を，「心の高尚」と「智徳」に分離し，再定義で，智徳を，安楽と品位（心の高尚）の上位概念としている。（このことは，平井，1994で詳説した。）

この分離の結果，再定義において二つの矛盾が生ずる。一つは，文明とは智徳の進歩なりとすると，文明は全ての事の「目的」とならず，少なくとも，安楽と品位（心の高尚）に関しては，「安楽と品位とを得せしむる」ため（目的）の「手段」となることである。他の矛盾は，広義においては，「高尚」は不可分な智徳から成っていたものが，再定義では，智徳が，智と徳（心の高尚）に分

離される可能性が生じたことである。現に，広義から再定義に至るプロセスでは，心の高尚が，顔回の高尚にたとえられている。福沢は「陋巷に居て水を飲む」顔回の高尚は否定しているはずであるから，始めの文明の広義にはこの観念はなかったであろう。

これらの矛盾は，始めの定義中の広義を「進歩」の観念を用いて再定義するプロセスにおいて生じたものであろうが，福沢は，恐らくは「進歩」を巡ってのこれらの隠された矛盾を，意図的かどうかは解らないが，後の議論の「伏線」としているのである。

第二の特徴は，再定義が「第三章」の後半および「第四章」以下の議論の伏線となっていることである（この「伏線」に注意を払ったのは，丸山真男『文明論之概略」を読む』である）再定義「文明とは人の智徳の進歩と云て可なり」は，「進歩」に関しては「第三章」後半部のある人の疑問への答えの，また，先の二つの矛盾を含む「人の智徳の進歩」に関しては「第四章」から「第七章」に至る智徳の議論の「伏線」になっている。上の第一の矛盾は，そのものとしては『概略』では展開されていないが，第十章「自国の独立を論ず」では，種々の条件がつけられながらも「国の独立は目的なり，今の我文明は此目的を達するの術なり（261)」とされ，文明を手段と見なし得る考えが示されている。第二の矛盾は，第六章「智徳の弁」で「智と徳とを区別して其趣の異なる所（105)」が示されている。また，第七章「智徳の行はる可き時代と場所とを論ず」では，智と徳がそれぞれ分離されて，時代，場所毎に論じられる。

以上の議論を簡単にまとめる。福沢とギゾーを，パラグラフやセンテンスのマイクロなレベル見た場合でも，文明の定義，文明の形容と事実，四群の人民と仮定された四社会，智徳の進歩と社会の進歩のそれぞれに関して，両者の間には，逆の対応関係を認めることができよう。

まとめ

福沢諭吉は『文明論之概略』の「緒言」において，『概略』を著述するに当たり，西洋の原書の「大意を斟酌し」て，これを日本の事実に参合したと言った。『概略』の「第三章」には，フランソワ・ギゾーの『ヨーロッパ文明史』の「第一講」の影響が，大変に強く認められる。本論は「第三章」に見られる「第一講」の「斟酌」の仕方を，チャプター，数パラグラフ，あるいは，一パラグラフやセンテンスのレベルで，ディスコース・アナリシスとして分析して，三節に分けて論じた。

第一節においては「第三章」の冒頭の一文を取り上げて，この文中の三点に認められる，解釈上の困難が，それぞれ，福沢によるギゾーの読み方と関係していることを論じた。すなわち，これらの解釈上の困難の背後には，福沢がギゾーに読み取ったことが，隠されている。この隠されているものを，本論では「暗示」と呼び，明示と暗示の対照をおこなった。

第二節においては，「第三章」と「第一講」を「章」や「講」のチャプターというマクロ・レベルで分析して，これら章と講は，構成上および内容上，ほとんど逆に対応していることを論じた。

また，第三節においては「第三章」と「第一講」を，パラグラフやセンテンスというマイクロ・レベルで分析して，四つの具体的対応点で，福沢とギゾーが逆に対応していることを論じた。

福沢がギゾーをどのように読んだのかという問題については，福沢の手択本やそれへの書き込み等の文献学的，思想史的研究は既に多くなされている。これらのいくつかは，本論が参照した松沢による『概略』の注釈であり，参考文献に示した丸山や小沢の研究である。

しかし，本論が問題としたことは，主に，福沢とギゾーそれぞれのディスコース・アナリシスの対比を通して見ることのできる，福沢とギゾーのレトリックの対比であり，両者のレトリック間の相互関係である。この種の研究は，福沢に関しても，また他の人間に関してもあまり為されてはい

ないと思われる。

この種の研究は，異文化間コミュニケーションの思想史的研究として，また広くは，翻訳や通訳のコミュニケーション研究として，さらには，異文化間対人コミュニケーションにおける，相互影響の研究として，より多く為されるべきであると思われる。

参考文献

小沢栄一『近代日本史学史の研究』明治編，吉川弘文館，昭和43。

ギゾー，フランソワ（安土正夫訳）『ヨーロッパ文明史』，みすず書房，1987。

後藤宏行『「語り口」の文化史』，晃洋書房，1983。

サンジェ，ジュール（及川　馥，一之瀬正興共訳）『弁論術とレトリック』，白水社，1986。

平井一弘「福沢諭吉と『西洋風の演説』」『福沢諭吉年鑑』19号，福沢諭吉協会，平成4（1992）年12月，pp.21-63.

平井一弘「福沢諭吉の「議論」論：『文明論之概略』第1章における「本位」とアリストテレスの審議的弁論に特有な「トポス」との比較」『大妻女子大学紀要（文系）』25号，平成5（1993a）年3月，pp.47-66.

平井一弘「『文明論之概略』における説得コミュニケーションの構造」『異文化コミュニケーション研究』第5号，神田外語大学　異文化コミュニケーション研究所，平成5（1993b）年，pp.19-40.

平井一弘「福沢諭吉『文明論之概略』における智徳論一命題，譬えおよび史文一」『大妻女子大学紀要（文系）』26号，平成6（1994）年，pp.57-85.

Guizot,M. *General History of Civilization in Europe from the Fall of the Roman Empire to the French Revolution*. Ninth American from the second English edition with occasional notes by C. S. Henry. D.D., Tokio: Kaishindo S. Kato, Jiujiya J. Iwafuji, & Co., 1891.

私が引用に用いたギゾーの日本語訳は，上の安土正夫訳『ヨーロッパ文明史』であるが，これはフランス語版よりの翻訳である。

私が参照したギゾーの英語訳は，上のヘンリー訳であるが，これは東京の出版社で発行されたことになる。ある種の海賊版かも知れない。私はこの書物を高梨健吉教授より拝借した。あらためてお礼を申し上げたい。